



昭和初期 紙本着色・六曲一隻 162.8×331.8cm 寄託

資料紹介 関 啓畝 《葛に鶉図》

茨城県久慈郡入四間村（現・日立市入四間町）に生まれた関啓畝（1886－1934）は本名を兵次といい、1902年（明治35）4月に茨城県立太田中学校（現・茨城県立太田第一高等学校）に入学するも同年10月には中退して日本画家の道を志した。その後数年を経た1905年に上京し、既に花鳥画の大家である荒木寛畝に師事していた縁戚関係の五島耕畝の紹介によって、寛畝の門に入っている。

1907年の第41回日本美術協会・正派同志会連合展に出品したものの翌年より4年間海軍に兵役し、1912年（大正元）頃に画業を再開して荒木一門の画会・読画会展で作品を発表した。その後1926年10月の第7回帝展で《ぶどう》が初入選して以降同展で入選を重ねたほか、茨城県における日本画展の草分けである茨城美術展に1927年（昭和2）の第3回展から出品して第5、6回展で無鑑査となるなど、同門の耕畝、永田春水らとともに日本美術院勢と渡り合う活躍を見せた。

啓畝の郷里に遺されたこの《葛に鶉図》は昭和初期に制作されたものとみられる。葛の葉と花が反復する形を抽象的に捉え、さらに背景に金地と微妙な色彩の階調を用いて平面性・装飾性を造形意匠として強調している。

里山の日常風景に柔和な装飾性を加味するこうした手法には、寛畝やその養嗣子の荒木十畝、池上秀畝といった一門の筆頭格の画家たちが見せる絢爛かつ濃厚な装飾的表現とは異なる視点がうかがえる。

また画面構成は大きく異なるものの、繊細な描画およびモチーフの親近性から、この作品には酒井抱一が尾形光琳の《風神雷神図屏風》の裏に描き加えた《夏秋草図屏風》（1821年、東京国立博物館蔵）の影響が見られるように思う。

啓畝は画家として成熟し始めた1934年（昭和9）に48歳で早世した。残された作品は決して多くはないものの、本作のように群生する草花を大胆な装飾的解釈で描いたものや湿潤な情感に満ちた作例などからは、啓畝が寛畝の「守旧漸進」の花鳥画風と、十畝門下におけるより近代的で柔軟な表現との両方を体得した、一門の隠れた俊英であったことが伝わる。

（大森潤也）

◆この作品は、収蔵美術品展「日立ゆかりの日本画家」（2025年2月16日まで）で展示しています



セバスティアン・ビスカイノ

1492年10月、コロンブスのアメリカ「発見」とともに本格化した大航海時代は、日立市とも無縁ではなかった。スペイン王の特使セバスティアン・ビスカイノ (Sebastián Vizcaino) を乗船させたガレオン船サン・フランシスコ号の漂着は、その端的な事例である。

スペイン南部アンダルシア地方の出身とされるビスカイノは、若くしてヌエバ・エスパーニャ (現在のメキシコにほぼ相当) に渡り、エンコメンデーロ (教化を条件としたインディオ使役権保有者) となった。ヌエバ・エスパーニャ副王の命を受け、カリフォルニア州などアメリカ西海岸の探検にも携わった。1608年、ヌエバ・エスパーニャ副王より、日本近海に存在するとされた金銀島探索を命じられ、1611年、スペイン王フェリーペ3世 (在位1598－1621年) の特使としてサン・フランシスコ号にて、メキシコ太平洋岸の海港都市アカプルコを出港した。

サン・フランシスコ号には、徳川家康の命を受け、前年ヌエバ・エスパーニャに渡った京都のキリシタン商人田中勝介他の日本人も同乗していた。ビスカイノの日本訪問は、日本人の送還を名目に、日西貿易の拡大、日本海岸の調査・測量、金銀島の探索、キリスト教徒保護などを徳川幕府に要請することにあつた。

アカプルコを出港したサン・フランシスコ号は、オランダ独立戦争以来敵対するオランダ船の攻撃を恐れ、マニラ経由ではなく、太平洋を横断し、直接、日本を目指した。しかし航行中に暴風雨に見舞われ、日立市の沖合に漂着した。『ビスカイノ金銀島探検報告』によれば、1611年5月9日に地元の小舟 8隻が近づいてきて、不審船の様子を探ろうとした。地元漁師はガレオン船に同乗していた日本人と話をかわす一方、見慣れない服装のスペイン人に恐れを抱き、多くは引き返した。残った4名の漁師を乗船させてワインや砂糖漬でもてなし、現在地を尋ねたところ、徳川頼房の領有する久慈浜 (Cuginahama) であることが判明した。船内には家康あての財貨が積載されおり、報酬の支払いを条件に浦賀までの水先案内を依頼したが、拉致を恐れた3人の漁師はガレオン船から海に身を投げ、小舟で逃げ去った。残る

1人の漁民を何とか説き伏せ、銚子経由で、三浦半島の浦賀に着岸することができた。地元の領主やキリシタンに歓迎されたビスカイノは、スペイン王フェリーペ3世の特使として、徳川家康と秀忠への拝謁を求めた。

正装したビスカイノは、王旗や銃を携えた随員を伴って江戸城に入り、徳川秀忠に接見した。次いで駿府城で徳川家康への朝見を許され、フランシスコ会士ルイス・ソテロを通訳として、前述したフェリーペ3世の要望を言上した。キリスト教徒の保護こそ認められなかったものの、太平洋岸の調査・測量と地図作製、金銀島探索は許された。早速、この任務に着手したビスカイノは、日本列島を北上し、ルイス・ソテロを伴い青葉城で伊達政宗と会見した。政宗はスペイン船の入港とスペイン貿易の拡大を切望しており、キリスト教徒の保護も約束した。

マニラを出港したスペイン船は、偏西風の関係で日本近海まで北上せざるを得ず、伊達藩内の月浦などの港は、浦賀と並ぶ有力な寄港候補地の一つであった。調査・測量と金銀島探索のためさらに北上したビスカイノは、慶長三陸地震に伴う津波に遭遇しながらも、北緯40度近辺の南部藩や松前藩領に達し、蝦夷地を望見した。『ビスカイノ金銀島探検報告』によれば、蝦夷地の先住民 (アイヌ) は、「眼だけを露出した毛深い野蛮人」であった。北海道南端で調査・測量と金銀島探索を打ち切ったビスカイノは、太平洋岸沿いに南下し、伊達、相馬藩領を経由して、再び久慈浜に入る。久慈浜に到着すると、水先案内人を勤めた地元漁師の家族や親族に歓待され、キリシタンに改宗する意志もある旨を告げられた。

浦賀帰還後も太平洋岸全体の調査・測量を継続し、家康・秀忠の親書を携えて帰途に就いたが、暴風雨に遭遇し、再び日本への接岸を余儀なくされた。サン・フランシスコ号の損傷が甚大であったことから、幕府に新船の建造を要請したが認められなかった。そのためビスカイノは1613年10月、かねてから親交のあった伊達政宗の家臣、支倉常長やルイス・ソテロなどと共に、サン・ファン・パウティスタ (スペイン語で洗礼者ヨハネを意味する) 号に乗り込んで月浦を出港し、翌年1月アカプルコに帰着した。

グローバル社会の起点となる大航海時代。長崎や平戸、月浦のみならず、日立市の久慈浜もその一端を担っていたことは、改めて想起されてよい。

(せき てつゆき 流通経済大学名誉教授)